

《二〇一五年十一月二十七日開催 講演会「世界の中の日本 第四回」要旨》

## 「忘れられた思想家」安藤昌益から見た日本の現代社会

ロマン・パシユカ

### 1 今にして安藤昌益

#### 1・1 安藤昌益との出会い

なぜ、ルーマニア人の私が安藤昌益の研究をしているのだろうか。この問いに答えるために、まず最初に簡単に自己紹介をし、そのあと安藤昌益という人物との出会いについて説明したいと思う。

私は中学校の時から外国語に興味を持っていたが、高校の時はフランス語と英語専攻の特別なバイリンガルクラスに入った。文学にも興味を持っていたので、主にフランスやイギリスの文学作品を頻繁に読んでいた。そんな中、高校4年生の時に偶然にルーマニア語に翻訳された、ある日本文学の作品に出合った。その作品を読んでみたら、「あ！これは面白い！これは日本語で読めるようにしたい！」と思ったの

がきっかけになり、日本語の勉強をはじめようと決心した。それは、井上靖の『猟銃』という短編小説だった。もちろん、ルーマニア語訳だったが、日本語からの直訳ではなく、ドイツ語を媒介とした重訳であった。そして、その年の夏に高校を卒業し、ルーマニアの首都にあるブカレスト大学に入学し日本語・英語ダブル専攻のクラスに入った。大学2年生の時、日本の古典文学に興味を持ち始め、卒業論文は『源氏物語』における女主人公について書いた。在学中に古典文学のみならず、近代文学や現代文学など、色々な時代の、色々なジャンルの文学作品を読み続けた。

学部を卒業してそのまま大学院、修士課程と博士課程に進学したが、博士論文は文学ではなく、安藤昌益とアダム・スミスの思想の比較について書いた。なぜ文学から安藤昌益思想の世界に移ったかということについてはのちほど詳しく説明するが、ここで言うておきたいことが一つある。皆様と同

様、私も日本語学習者、日本語教師、日本研究者などといった様々な側面を持っているが、私の中でこれらの側面を貫くのが文学である。簡単にまとめると、文学が好きで日本語の勉強をはじめ、文学が好きで安藤昌益の研究をはじめ、という流れになる。

さて、安藤昌益という人物とどのように出会ったかという、実はそのきっかけも文学だった。Philippe Forestというフランス人の作家が「Sarinagara」という小説を2004年に出しているが、そのタイトルは以下的小林一茶の一句にインスパイアされたらしい。

霧の世は 霧の世ながら さりながら

Forest氏は「さりながら」という単語が気になり、小林一茶、夏目漱石、山端庸介の三つのストーリーを描いた小説を書くと思ったそうである。そして、小説の一節を説明するための作者注があり、その中に農本主義 (physiocratie) についての記述があった。農本主義とは何かと調べてみたら、その特徴としては「富の唯一の源泉は農業である」という考え方であり、農本主義のフランス人の思想家は自由放任 (laissez-faire) の立場を主張し、結局その思想がイギリスにも渡り、アダム・スミスにも大きな影響を与えたとのことだ

ある。そして農本主義についてのある論文を読んだら、その中に安藤昌益も農本主義の思想家ではないかという説があった。その時に初めて、「安藤昌益」という名前を知った。そこから昌益を研究し始め、それが徐々に面白くなっていき、博士論文で安藤昌益とアダム・スミスの比較をすることに至ったわけである。論文で安藤昌益とアダム・スミスの思想における「自然」という概念について書いたが、その中でも特に「人間」と「自然」との関係はどう描かれているのかというところに着目した。

## 1・2 「大思想家あり」

明治時代の1869年に高校の教員だった狩野亨吉先生がある古本屋で『自然真営道』という書籍を発掘する。その時点で、安藤昌益や『自然真営道』についてほとんどだれも何も知らない状態であった。狩野先生が『自然真営道』をはじめ安藤昌益の著を全部購入し、その思想に興味を持ちはじめ、そして1908年に「大思想家あり」というタイトルで初めて安藤昌益について『内外教育評論』に論文を出す。その中で、狩野先生が安藤昌益のことを農本主義の思想家として紹介している。その後、当時の東京帝国大学が1923年の3月に狩野先生から安藤昌益の書籍をすべて購入し、付属図書館で保管する。しかし、その半年後、9月の関東大震災で図書



ロマン・パシュカ

館でも火事が起こり、貸出中だった12巻を除いて101巻あった安藤昌益の著が全焼する。ということで、現在、『自然真営道』や『大序巻』などが残っているが、それは安藤昌益が書いたものの一部に過ぎない。

狩野先生がその後も安藤昌益の研究を続けているが、1988年に『安藤昌益』というタイトルで初めて安藤昌益について書いた本を出版する。その次に、戦後の1949年にE. Herbert Normanというカナダ人の研究者が *Ando Shoeki and the Anatomy of Japanese Feudalism* を刊行し、それが1960年に日本語にも翻訳され、『忘れられた思想家：安藤昌益のこと』というタイトルで出版される。

以上のような流れを見ると、安藤昌益の研究はまだ歴史が浅いことが分かる。その開始から100年ほど経っているが、英語やフランス語など、日本語以外の言語で安藤昌益について書かれた論文や本はまだ非常に数が少ないし、これからの様々な課題が残っている。

## 2 安藤昌益の世界

### 2・1 安藤昌益という人物

ここから、安藤昌益の世界に入りたいと思う。

まず、この安藤昌益という人物はだれだったのかということについて簡単に説明すると、1703年に秋田藩の新田村の農家に生まれるが、その後ほとんど記録が残っておらず、どのような生活を送っていたのかについては詳細が分からない、謎の人物である。15歳ぐらいの時に京都に移動し、北野天満宮で修行したことがあるという記録が残っているため、禅を学び始めたことが明らかになっている。しかし、それと同時に、禅だけではなく儒学・儒教、そして道教についても学んだのではないかと説もある。昌益が書いたものを読んでみると、仏教のことだけではなく儒学や道教のことも非常に詳しく、いずれも修行したはずであると推測できる。京都で禅を学び始めるが、途中でやめ、医学の修行をはじめ

る。これについても、記録が残っている。しかし、その後の10年ぐらいいは何をしていたのか、記録がないので分からない状態であり、突然、1761年に八戸に移住し開業医となる。

1749年に八戸藩で飢饉が発生し約3000人ぐらい餓死するが、昌益はこの出来事も経験するわけである。この時点で既に村の人たちと一緒に生きて生活しているので、いろいろな社会問題や、村の人たちの葛藤などを目の当たりにしている。そのため、世の中のあり方や「自然」と「人」との関係など、様々な社会問題について考えるようになる。そして、1762年に『自然真営道』や『東道真伝』の執筆にとりかかり、1763年に60歳でなくなる。

## 2・2 安藤昌益の思想

安藤昌益の思想においてキーワードになっているのが「自然」という概念である。江戸時代には「自然」という単語は英語の“Nature”という意味でほとんど使われていなかった。「自然」とは「自らなる」という意味で、形容詞、あるいは副詞として使われていた。そして、現在我々が使っている「自然」というタームに当たるものとしては、「花鳥風月」「山川草木」「山河大地」などのような単語がよく使用されていた。

なぜかという、その当時、「自然」というものを人間に

対する一つのものとして、総体的なものとして捉えていなかったからである。「花鳥風月」や「山川草木」のような単語でも分かるように、この世の中を万物の集まりとして捉えていたが、それを総体的に、思考の対象として、「自然」という一つのものとして捉える発想はなかった。そこに、安藤昌益が登場する。

昌益にとって「自然」とはどういうものかという、以下のように説明されている。

自然トハ互性妙道ノ号ナリ。互性トハ何ゾ。曰ク、無始無終ナル土活真ノ自行、小大ニ進退スルナリ。小進木・大進火・小退金・大退水ノ四行ナリ。自り進退シテ八気互性ナリ。[∴]故ニ無始無終ナリ。是レガ妙道ナリ。妙ハ互性ナリ、道ハ互性ノ感ナリ。是レガ土活真ノ自行ニシテ、不教・不習、不増・不減ニ自り然ルナリ。故ニ是レヲ自然ト謂フ。

まとめてみると、「自然」は始まりもなければ終わりもない、「無始無終」のものであり、非常にダイナミックな存在である。さらに、「自然」とは「不教不習」「不増不減」のものである。その構成を詳しく説明するために、「転定」(てんちやう)、「活真」(かつしん)、「直耕」(ちやうこう)という三

つの概念について触れたいと思う。ここで一つだけ具体例を挙げてみると、例えば「活真」（かつしん／いきてまこと）という概念は、「自然」の中のをすべて動かしているエネルギーのことである。

まず、「てんち」は普段「天地」と表記するが、昌益の「転定」（てんち）は既存の概念である。昌益は「天地」という表記に対して不満を感じ、その代わりに「転定」という書き方を提案する。なぜかというところ、「転がつて定まる」と書くところ、やはり「自然」というものの、世の中の流動性、ダイナミックスがよりよく伝わってくるからである。つまり「天地」だと、固定された存在になってしまい、「天」は上にある、「地」は下にあるが、その間に何もないという発想である。昌益にとっても「てん」は上にあり「ち」は下にあるが、その間に色々なものが動いているため、「転定」という表記の方が相応しい。始まりも終わりもない、「無始無終」のものだからこそ、「てん」と「ち」との間に様々なエネルギーのサイクルがあり、それらは常に動いている、というイメージである。そして、そのサイクルを動かしているのは、「活真」（かつしん）というものである。

ここで、「直耕」（ちよっこう）という概念も登場するが、「直耕」も一つのキーコンセプト、昌益の思想を理解するための鍵でもある。「直耕」とは、文字を見ると「直接耕す」

という意味になるが、実は「耕す」だけではない。つまり、「農業」だけではない。そういう意味もあるが、「直耕」という概念は傘のようなもので、その中に色々な作業や動作が含まれている。例えば、畑を耕すのも「直耕」であるが、それだけではなく、お茶を淹れる、料理を作るなどといった作業も「直耕」である。さらに、昌益にとって「直耕」とは「直耕ノ一業シテ別業無シ」のものである。人間も鳥も魚も、この世の中に存在しているものはすべて独自の「直耕」があるはずだということである。「直耕」の形はそれぞれ違うが、最も広い意味で捉えたと「創造力」のようなものである。特に人間の場合、ものごとについて考えたりものを作ったりする力である。

もう一つ、重要なコンセプトは「互性」（ごせい）という概念である。「互性」を英訳すると「互」は「mutual」、「性」は「nature」、あるいは「character」になるが、両方合わせると「mutual natures」になる。昌益は以下のように説明している。

活真ナル故ニ、常ニ進退・互性ニ妙行シテ、一息止ム  
コト無シ。「…」男ノ性ハ女、女ノ性ハ男、男女互性  
ニシテ活真人ナリ。

つまり、男は女の特徴、女のマインドも持っている、逆に女は男の特徴、男のマインドも持っている、という考え方である。ここに出てくる「男女」という熟語は普段「だんじょ」と読むが、昌益は「ヒト」と読むべきだと言っている。つまり、「だん／じょ」、「おとこ／おんな」、別々の存在として捉えない方がいいということである。「おとこ」があるからこそ、「おんな」もある、そして「おんな」があるからこそ「おとこ」もある、という発想である。

「自然の世」について語っている中で、昌益は「自然の世」に対する、もう一つの世としては「法の世」（ほうのよ）が存在すると唱えている。「法の世」は人間の社会であり、毎日のように目の当たりにしていた階級社会、つまり大名や武士などが存在する社会のことである。そして、この「法の世」についても書いているが、それは批判するためである。例えば、『自然真営道』には寓話のようなものもあり、その中に鳥たち、虫たち、または魚たちが集まり、「法の世」、つまり人間の社会について語り合う。以下、虫の寓話の中の引用である。

故二、人ノ法世ノ大ハ小ヲ食フ序ト、虫世ノ大ハ小ヲ食フ序ト相同ジ。故二、法世ノ人ノ為ル処ト、虫類ノ為ル処ト、又相同ジ。

「人の法世（ほうせい）の大は小を食ふ」とあるが、それは人間の社会でも大は小を食うという喩えである。そして、それは虫の世の「大は小を食ふ」とまったく同じであるため、人間の社会は虫の世と同じである。昌益は常にこのような比喩やメタファーを使用し、人間の社会を批判している。

昌益が創り出した「直耕」という概念に触れたが、「かつしん」も同様である。「てんち」とは既存の概念ですが、それに対して昌益は不満や疑問を覚え、書き方が正しくないということと他の書き方を提案する。なぜかという点、実は言語そのものに対して疑問を持っているからである。昌益にとっては、昔の人が勝手に文字を作り、そしてその文字でものを書いたりすることを通して人をコントロールしようとしてきたわけである。つまり、文字を使い始めたことで人間が「直耕」の道から遠ざかってしまったということである。そして、文字があるからこそ階級社会ができてしまった、文字があるからこそ支配者と非支配者というカテゴリーができたという思想である。

## 2・3 安藤昌益はどう読まれたか

ここで、安藤昌益の思想はどのように解釈され、どのように読まれたかということについて触れたいと思う。西洋の研究者が書いた論文や本を見ると、非常にオリジナリティな、独創

的な思想家だったという意見もあれば、ほとんど知られていないユートピアンだったという意見もある。

前述のように、西洋の研究者で初めて安藤昌益について書いたのはハーバート・ノーマンであるが、ノーマン氏は安藤昌益のことを非常に独創的な思想家、独自の哲学システムを創りだした人物として紹介している。その次、1992年にYasunaga Toshinobuという日本人の研究者が執筆した *Ando Shoeki - Social and ecological philosopher* という本があるが、Yasunaga は特に人間や「男女」(ひと)というコンセプトにフォーカスし、ヒューマニスティックな思想家として紹介している。Yasunaga 氏の本の一つの大きなメリットは、『自然真営道』の一部を英語に翻訳したということである。しかし、例えば「自然」という概念を前半では *“self-acting living truth”* と翻訳し、後半では統一せず *“spontaneous doing”* と翻訳するので、改善の余地があると思われる。

最後に、Jacques Jolly というフランスの研究者が執筆した本も紹介したいと思うが、*Le naturel selon Ando Shoeki* というタイトルの本である。ジョリー氏によると、日本思想史の流れの中で安藤昌益が初めて「自然」というものを総体的なものとして捉えたという。それまで、「花鳥風月」や「山川草木」のように、様々なパーツの組み合わせとして捉

えてきたが、それを思考の対象として捉えていなかった。昌益が初めて「自然」を考えることの対象として解釈し、総体的な存在として捉えているので、日本思想史で非常に大きな位置を占めている思想家であると言える。

### 3 安藤昌益から見た現代社会

#### 3・1 貧困の差

次に、「安藤昌益と現代社会」について見てみよう。ここでは貧困の差、男女の平等、そして自然との共生という三つの問題を取り上げ、これらについて昌益思想の枠組みの中で考えてみたい。

最近、「パート」、「非正規雇用」、「ワーキングプア」などのようなキーワードをよく耳にするようになったが、特に「ワーキングプア」については働いてはいるが実はプアであるという、非常に厳しい社会現象を指しているチームである。日本だけではなく他の先進国も抱えている深刻な社会問題の一つである。では、例えばワーキングプアについて安藤昌益から考えたときにどうなるか。

前述のように、昌益は寓話の中で「大は小を食う」とはその世なりの「直耕」であると言っているが、人間がその「直耕」から遠ざかってしまったので人間が作った社会に階級が



ある。このように、昌益は階級なき社会を訴えているという  
ことが窺える。さらに、ダイナミックな自然の中にいろい  
ろなエネルギーがあり、具体例を挙げると「通気」（つうき）  
「横気」（おうき）、そして「逆気」（ぎゃくき）の三つのエネ  
ルギーがあると昌益は説明している。が、それ以外に「余  
気」（よき）という気もある。そして、この「余気」という  
概念から、「余」（よ）、余るものについて論じ始める。例え  
ば、農家の場合、畑を耕し、穀物や野菜などを作りそれを食  
べるが、余るものも必ずある。「余」にあたるものである。  
また、海の近くに住んでいる漁師の場合、毎朝海に出て魚を  
獲ったりしているが、余るものも必ずある。そうすると、農  
家の余った野菜と、漁師の余った魚とを（物々）交換すれ  
ば、それも一つの「直耕」であると論じている。昌益の考え  
ている「自然の世」の中に金銭など意味がないから存在しな  
い。

### 3・2 自然との共生

次に、自然との共生というテーマについて、まず「森林の

破壊」や「大気汚染」など、経済発展とともに自然破壊も多  
くなっている現象について考えてみたい。安藤昌益の思想で  
は、「転定」はダイナミックな関係にあり、常に動いている  
わけなので人間も実はその真ん中に存在し、自然をコント  
ロールするような立場にない。人間も「自然の世」の一部に  
過ぎず、人間も世の中の一つのパーツでしかない。このよう  
に考えると、すべての存在に独自の「直耕」があるはずだ  
し、人間の「接耕」は自然をコントロールすること、自然を  
破壊することでは決していない。モノを過剰生産することでも  
ない。これは、エコロジーに非常に近い考え方であり、現代  
社会の以上のような問題を考える時にこのような観点も必要  
不可欠であると思われる。

### 3・3 男女平等

最後に、男女平等の問題についても触れたいと思う。前述  
のように、昌益は「だん／じょ」、「おとこ／おんな」で考え  
ることに無理があると言っているが、『世界男女格差レポート』  
（世界経済フォーラム、2015年）の統計などを見ると男女の  
格差が最も少ない国はアイスランドであり、日本は世界101  
位である。このデータでも分かるように、男女の格差は日本  
社会においては非常に深刻な問題である。昌益の「ヒト」と  
いう概念を援用し「おとこ／おんな」ではなく「ヒト」とい



う枠組みで考えると、結局、男は女、女は男、ということになる。さらに、これをもう少し拡張していくと、「男は女」だから、「私はあなた」、そして「あなたは私」、ということにもなる。そして、それが社会全体に広がっていき、社会の構成員全員を一つの存在、一人の人間として考えることに繋がるわけである。昌益の「ヒト」という概念を拡張していくと、男女の格差という問題が非常に不自然なものになってしまい、その改善や社会変革が必要になってくる。

## おわりに

最後に、安藤昌益研究における今後の課題についても触れてみたいと思う。まず、現代社会の問題を考える時に、昌益の『自然真営道』や他の書籍を読み直す意義があると思う。読み直す時に文学や哲学だけとして読むのではなく、様々な観点、様々な角度、様々なアプローチから読み直す必要がある。例えば、ジョリー氏は安藤昌益とフランス哲学者のルソーを比較するが、そのような比較からいろいろなヒントや知見が得られるので、これからもそのようなスタンスで研究を続けていくことが大事だと思われる。

もう一つは、英語やフランス語など、『自然真営道』の他の言語への翻訳も緊急の課題だと思う。安藤昌益の思想について発信するためにできるだけ多くの人に知ってもらいたいからである。

## 参考文献

- ・『安藤昌益全集』農山漁村文化協会、1982年
- ・狩野亨吉「安藤昌益」『岩波講座 世界思潮』、1928年
- ・Joly, Jacques. 1996. *Le naturel solen Andô Shōeki. Un type de discours sur la nature et la spontanéité par un maître-confucéen de l'époque Tokugawa*. Paris: Maisonneuve et Larose.
- ・Norman, E. Herbert. 1949. "Andô Shōeki and the Anatomy of Japanese Feudalism." *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, 3-2.
- ・Yasunaga Toshiobu. 1992. *Andô Shōeki - Social and Ecological Philosopher of Eighteenth-Century Japan*. New York: Weatherhill.